

隈川雑詠その(二) (広瀬淡窓)

観音 閣上 晩雲 帰る

忽ち 鐘声の 翠微を 出ずる 有り

沙際 舟を 争うて 人 未だ 渡らず

双々の 白鷺 江に 映じて 飛ぶ

観音閣上晩雲歸 忽有鐘聲出翠微  
沙際争舟人未渡 雙雙白鷺映江飛

解説 この詩では、隈川とそのほとりの夕暮れの閑雅な風景を具象的に描いている。一幅の絵画を眼前に見るようである。

語釈 ※隈川Ⅱ淡窓が住んだ日田市の南部を流れる川。※晩雲Ⅱ暮雲、即ち夕暮れの雲のこと。※忽Ⅱそうこうするうちに。

※翠微Ⅱ山の中腹から八合めあたりをさす。※沙際Ⅱ渚。水際、砂浜というのも同義。※争舟Ⅱ渡し舟に先を争って乗ること。

※人未渡Ⅱ客同士が席を争って収拾がつかず、なかなか舟が出せぬ状況をいう。※双双Ⅱ二対をいう。※白鷺Ⅱしらさぎ。水鳥である。

通釈 観音閣上に夕雲が帰って来る。その雲に見とれているうちに、ふと山腹から鐘の音が聞こえてくる。その音に、われにかえつて渚に目を転ずれば、客が渡し船の席を奪い合つて、なかなか船が出せないのが見える。折りから、二対の白鷺が、下界の人間の争いなど気にもならぬげに、美しい色を川面に映して、心地よく